下月隈天神森遺跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第456集

1996

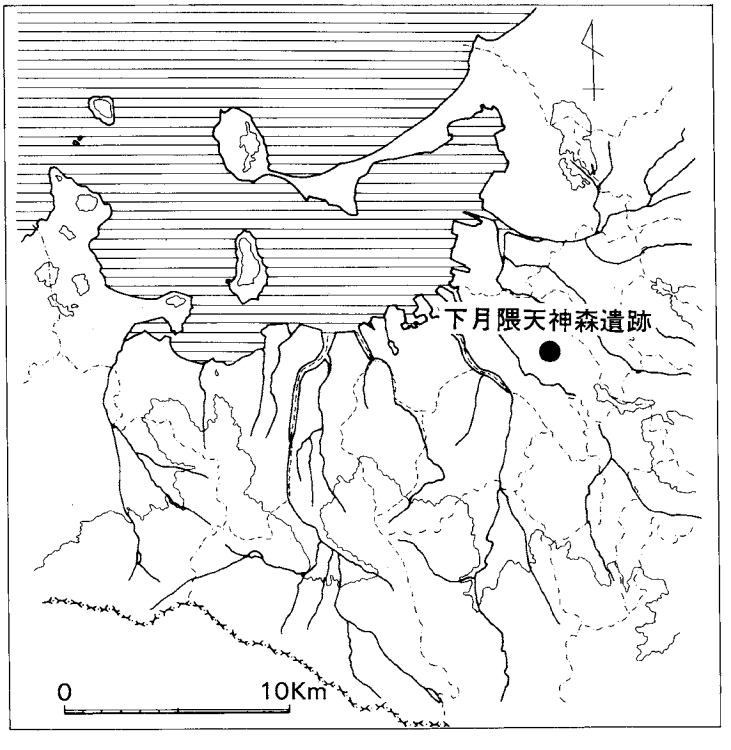
福岡市教育委員会

しもつきぐまてんじんもり

下月隈天神森遺跡II

－下月隈天神森遺跡第２次発掘調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 456 集



遺跡略号　STM－２
遺跡調査番号 9352

１９９６

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡平野の席田丘陵から月隈丘陵にかけての一帯は、非常に多くの遺跡群が広がっています。

今回報告する下月隈天神森遺跡は福岡市都市整備局による下月隈公園建設に伴って、平成５年12月から翌３月にかけて発掘調査が実施された第２次調査を報告するものです。

調査の結果、戦国時代の掘立柱建物群やそれらを区画する溝などが検出されるなど、新たな知見が得られ、多大な成果を収めることができました。本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた都市整備局の方々を始めとする多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　　言

1．本書は福岡市都市整備局による公園建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成5(1993)年度に発掘調査を実施した福岡市博多区大字下月隈所在の下月隈天神森遺跡第2次調査の報告である。

2．本書に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎の他、星子輝美が、撮影は佐藤があたったが、空中写真は有限会社空中写真企画による。

3．本書に掲載した遺物の実測・撮影は佐藤があたった。

4．製図は遺構を藤村佳公恵、遺物を佐藤が行った。

5．本書の執筆・編集は佐藤が行った。

6．本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9352			遺跡番号	STM−2
調査地地籍	福岡市博多区下月隈			分布地図番号	10（東部Ⅰ）
開発面積	3,100㎡	対象面積	3,100㎡	調査面積	2,970㎡
調査期間	1993（平成5）年12月1日～1994（平成6）年3月13日				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに

1　調査にいたる経過……1

2　調査の組織……1

Ⅱ．遺跡の位置と環境……1

Ⅲ．発掘調査の概要……2

Ⅳ．遺構と遺物……3

1　検出遺構……3

2　出土遺物……13

Ⅴ．小結……18

挿 図 目 次

第1図　下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡……3

第2図　下月隈天神森遺跡調査地区位置図……4

第3図　下月隈天神森遺跡第2次調査周辺地形図……5

第4図　下月隈天神森遺跡第2次調査遺構配置図……折り込み

第5図　掘立柱建物実測図(1)……7

第6図　掘立柱建物実測図(2)……9

第7図　掘立柱建物実測図(3)……10

第8図　掘立柱建物実測図(4)……11

第9図　土壙実測図(1)……12

第10図　土壙実測図(2)……14

第11図　土壙実測図(3)……15

第12図　甕棺墓・土壙墓実測図……16

第13図　出土遺物実測図(1)……17

第14図　出土遺物実測図(2)……18

図 版 目 次

図版１　(1) 下月隈天神森遺跡第２次調査全景（上空から）

(2) 下月隈天神森遺跡第２次調査全景（南から）

図版２　(1) ＳＢ01・02掘立柱建物、ＳＤ03・04溝（西から）

(2) ＳＤ10・11溝（南から）　(3) ＳＸ38甕棺墓（南から）

(4) ＳＸ34土壙墓（南から）　(5) ＳＫ28土壙（南東から）

(6) Pit15土壙（南から）

図版３　(1) ＳＫ28土壙（南西から）　(2) ＳＫ36・37土壙（北西から）

(3) ＳＥ25土壙（北東から）　(4) ＳＥ25土壙杭出土状況(南西から)

(5) ＳＫ05土壙（北から）　(6) 調査区東側（北から）

図版４　ＳＤ01・03・04・42・45出土陶磁器・土製品・銅銭

図版５　ＳＤ07・13・42・45・ＳＥ25・ＳＫ29・Pit147・148出土土師器・陶磁器

図版６　Pit15・ＳＫ05・ＳＤ41～43・45・04出土土器・陶磁器

I はじめに

1 調査にいたる経過

1993年年度事業照会を受けて、福岡市都市整備局公園計画課から教育委員会埋蔵文化財課に対して博多区大字下月隈５０１－１外における下月隈公園造成に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの下月隈天神森遺跡がのる丘陵の尾根筋南東に隣接する谷間に位置し、申請地の北西に近接したところでは1980年に道路建設に伴って第１次調査が行われている。埋蔵文化財課は、これを受けて1993年５月12日に試掘調査を実施した。現況は宅地で西に面して３段に造成されていた。調査の結果、削平を受けている上段以東を除いて黄褐色土層上面で遺構が確認された。公園計画課と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積 3,100㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は同年12月８日から翌1994年３月13日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 福岡市都市整備局公園計画課
調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課
調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 學（前任） 荒巻輝勝
第２係長 山崎純男（前任） 山口譲治
庶務担当 吉田麻由美（前任） 西田結香
調査担当 試掘調査 吉武 学 長家 伸
発掘調査 佐藤一郎
発掘調査・資料整理協力者 相川嘉和・石屋四一・井上秀一・乙部武彦・尾花憲吾・上村吉信・川上康彦・小林義徳・熊谷篤史・関義種・鳥山幸男・中山登樹・中村米重・村岡義浩・百津等・高木啓太・内山マサ子・江越初代・岡本妙子・金子栄子・河津信子・桑原美津子・関加代子・曾根崎昭子・高手与志子・高塚智江・中沢久美・那波幸子・西小路由美子・西田幸子・野口リュウ子・播磨博子・福田友子・船越エミ子・星子輝美・前田知栄子・森園弘子・山口慶子・藤村佳公恵・斉田紀代美・千住香織・相川和子・田中ヤス子・藤野邦子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について、施工の福岡市都市整備局公園緑地部公園建設課をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II 遺跡の位置と環境

福岡平野の東を限る三郡山地より派生した大城山（標高410m）は山頂部に７世紀後半に白村江の戦を契機として築城された朝鮮式山城大野城跡が位置している。その山麓の南東から北西に月隈丘陵が

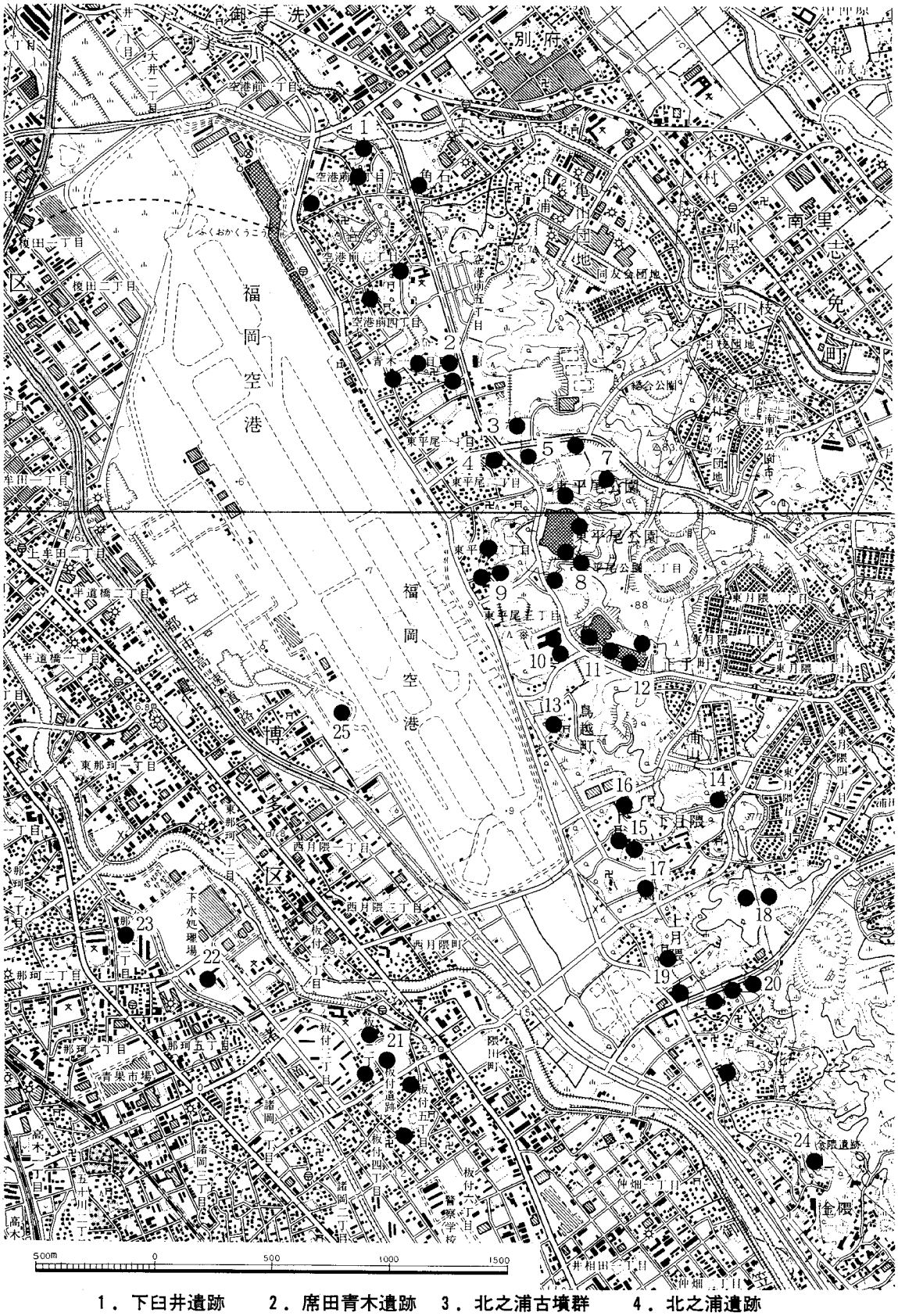
延びている。丘陵上には周知の遺跡が数多く分布している。弥生時代全般にわたる共同墓地である金隈遺跡[註1]、弥生時代の墓地、貯蔵穴、古墳2基を含む宝満尾遺跡[註2]を始め、持田ヶ浦古墳群[註3]、堤ヶ浦古墳群など非常に多くの古墳が群集している。

丘陵の西側には支丘が幾つも延びており、今回の調査区域は支丘にはさまれた谷間に位置する。標高は14～15mを測り、福岡空港滑走路東南角の350m東に当たる。今回の第2次調査区の北西40mの標高約20mの小丘陵上では1980年に市道下月隈藤田山手線建設に伴い発掘調査が行われ、弥生時代中期から後期にかけての土壙墓19基からなる共同墓地、5世紀後半前後の墳形は不明ではあるが内部構造に横穴式石室をもつ古墳2基、時期不明の掘立柱建物1棟が検出されている[註5]。第2次調査区の南100mの標高約22mの小丘陵上では1979年から1980年にかけて土砂採取に伴って発掘調査が行われ、弥生時代中期後半から後期初頭にかけての甕棺墓21基、土壙墓9基からなる共同墓地が検出されている[註6]。

月隈丘陵において古代から中世にかけての遺構は中国陶磁が埋納された墳墓や掘立柱建物[註7・8]、16世紀代の城郭の一部を形成するとみられる溝の検出例[註9]があるが、遺跡としては断片的にしか捉えられない状況である。しかし文献の上では、今後考古学上の多大な成果を推測しうる記事が散見される。「古今著聞集」にもみられる蔦田駅は月隈周辺にその所在が推定されている。南北朝時代の観応2(1351)年の鎮西管領一色氏と敵対する少弐頼尚、足利直冬による月隈合戦、戦国時代の天正8(1580)年に立花山城主戸次道雪による「切り寄せ」構築の命の記事など[註10]今後の考古学的な調査による裏付け、再検討が待たれるところである。

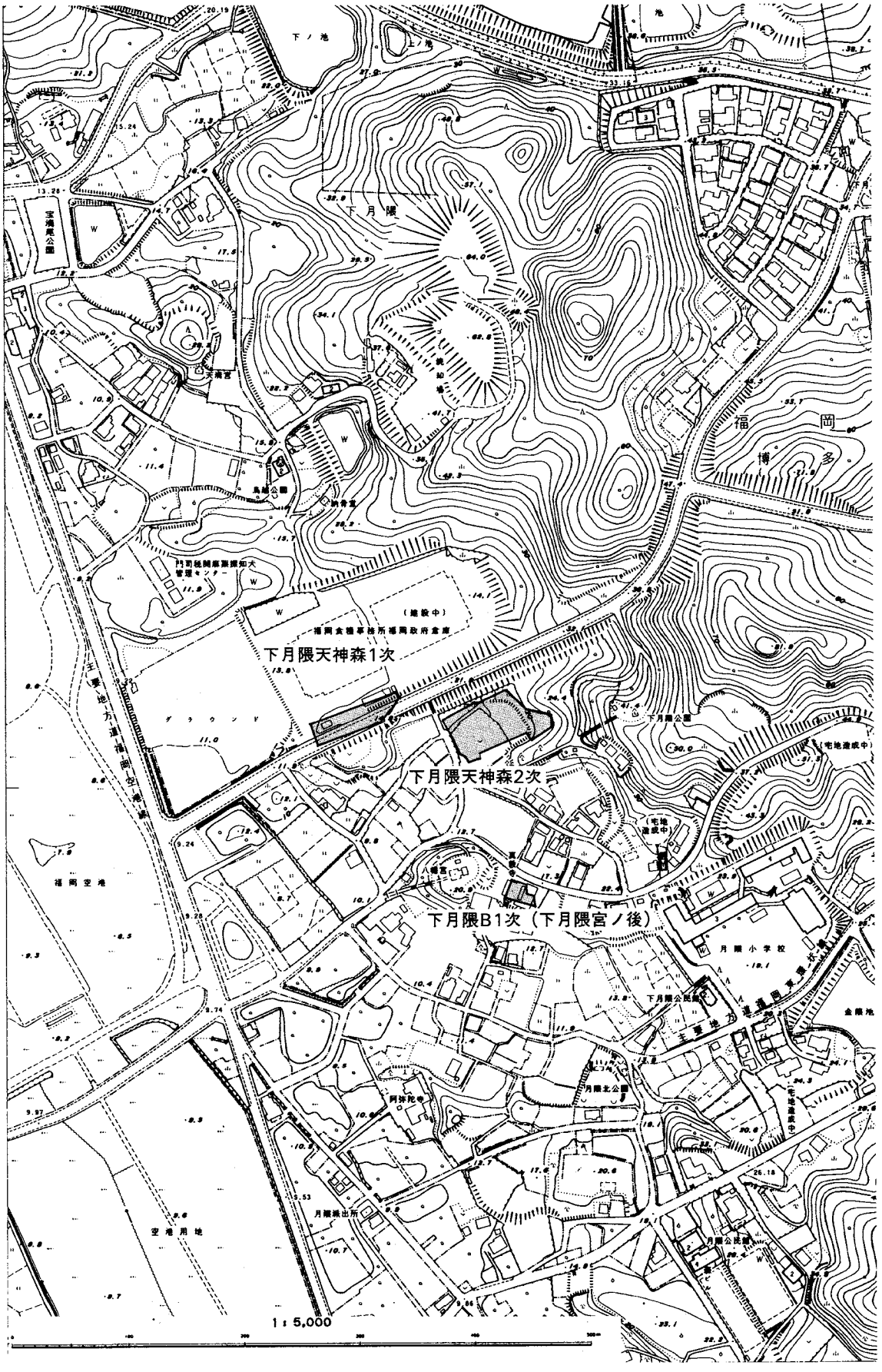
註

1．福岡市教育委員会　『金隈遺跡第1次調査概報』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集　1970
　福岡市教育委員会　『金隈遺跡第2次調査概報』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集　1971
2．福岡市教育委員会　『宝満尾遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集　1974
3．福岡市教育委員会　『持田ヶ浦古墳群1・2号』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集　1971
4．福岡市教育委員会　『堤ヶ浦古墳群』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集　1987
5．福岡市教育委員会　『下月隈天神森遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集　1981
6．福岡市教育委員会　『下月隈宮ノ後遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集　1980
7．福岡市教育委員会　『久保園遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集　1983
8．福岡市教育委員会　『席田青木遺跡　2』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 408集1995
9．福岡市教育委員会　『席田青木遺跡　1』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 356集1993
10．以下「角川日本地名大辞典」編纂委員会　『角川日本地名大辞典　40　福岡県』角川書店1988西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部　『福岡県百科事典』　西日本新聞社　1982による

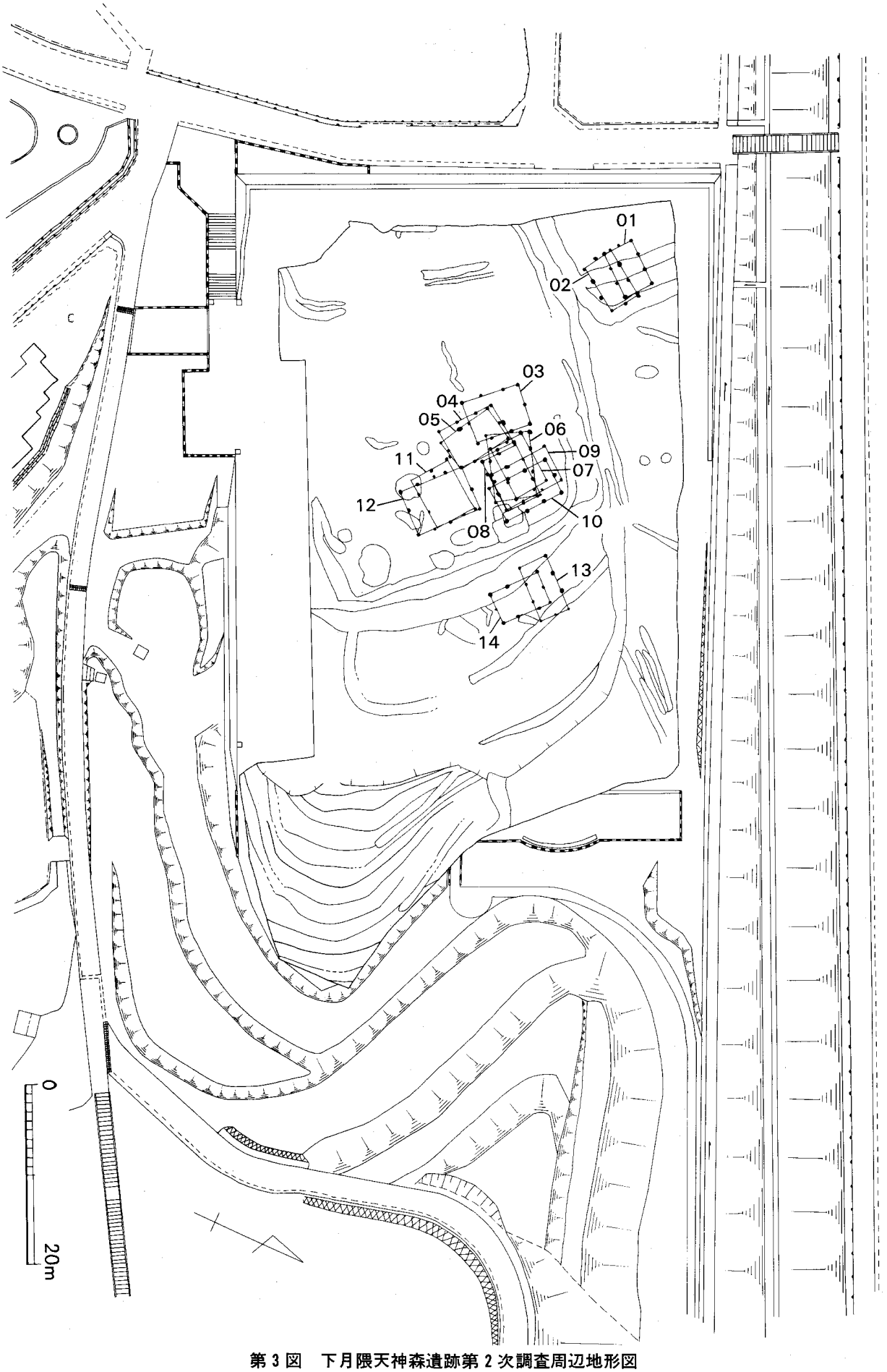


1．下臼井遺跡　2．席田青木遺跡　3．北之浦古墳群　4．北之浦遺跡
5．中尾遺跡群　6．貝花尾古墳群　7．新立表古墳　8．大谷遺跡群
9．久保園遺跡　10．宝満尾遺跡　11．宝満尾東遺跡　12．上ノ池古墳
13．雀居古墳　14．下月隈古墳群　15．下月隈Ｂ遺跡群　16．下月隈天神森遺跡
17．上月隈遺跡群　18．上月隈古墳群　19．文殊谷古墳群　20．谷頭古墳群
21．板付遺跡　22．那珂君休遺跡　23．那珂深ヲサ遺跡　24．金隈遺跡
25．雀居遺跡

第１図　下月隈天神森遺跡と周辺の遺跡



第２図　下月隈天神森遺跡調査地区位置図



第 3 図　下月隈天神森遺跡第 2 次調査周辺地形図

III　発掘調査の概要

下月隈天神森遺跡第２次調査区は下月隈天神森遺跡がのる丘陵の尾根筋南東に隣接する谷間に位置する。現況は宅地であった。福岡空港の騒音に伴う運輸省による個別世帯の宅地の買い上げ、転居により、公園予定地内はもとより周辺の民家も転居、家屋の解体が進んでいた。調査は1993年12月１日にバックホーによる表土剥ぎから始めた。残土は城内で処理し、西側の擁護壁部分から着工することから、西側から表土を剥ぎ東側に送る手順で行った。12月９日西側から調査区域の約60％の部分の精査を開始した。遺構は客土、耕作土下の黄褐色土層（風化した第三紀層の堆積岩）上面で確認されたが、家屋解体の際に外部に搬出できなかった廃棄物を焼却し処分するためにバックホーで掘られた廃棄物処理坑が10カ所ほどみられ、遺構を損壊していた。今後の家屋解体の際の指導の徹底を望む。遺構面は西に面して緩斜面をなし、削平を免れた部分には遺物包含層が残る。検出された遺構は柱穴、溝、土壙で、柱穴の内14棟分を建物としてまとめることができた。遺構の時期は一部を除いて14世紀後半から15世紀前半までにおさまるようである。溝はＬ字状、コ字状に建物群を廻っていた。区画のためにめぐらされたと同時に、調査期間中も絶えることがなかった谷間の湧水を流す目的で開鑿されたのであろう。翌1994年１月26日には空中写真による全景撮影を行った。２月２日には弥生時代前期後半の甕棺墓１基を検出した。２月24日に先に表土を剥いだ部分の遺構実測を終え、残り部分の表土剥ぎに入る。３月13日をもって遺構の完掘、写真撮影、遺構実測をすべてを終了した。

IV　遺構と遺物

１　検出遺構

掘立柱建物　都合14棟の建物をまとめることができた。重複関係から建物群の構成を最低４期に区分することができる。

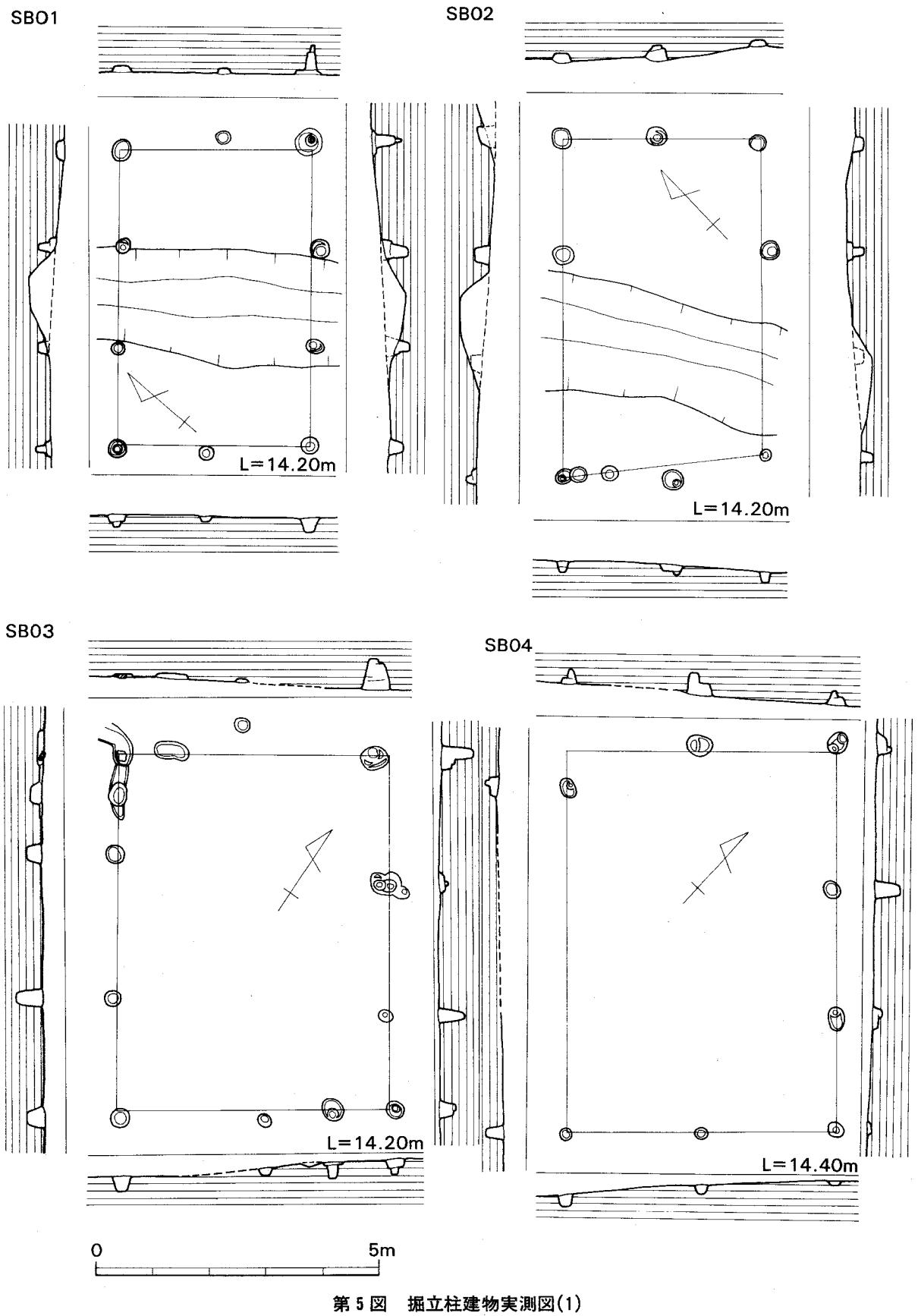
ＳＢ01（第５図、図版２）　調査区の北西で検出した。梁間２間、桁行３間の建物である。梁間の全長5.7m、桁行の全長3.2mを測る。柱穴は円形で、径20～50cm、深さ10～50cmを測る。方位はＮ－48°－Ｅにとる。ＳＤ04溝に切られているが、ＳＤ04の埋土に掘り込まれた柱穴が識別できなかった可能性もあるので、ＳＤ04との先後関係は不明である。

ＳＢ02（第５図、図版２）　調査区の北西で検出した。ＳＢ01と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ01の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－43°－Ｅにとり、ＳＢ01よりやや東にふれる。梁間の全長5.7m、桁行の全長3.5mを測る。柱穴は円形で、径20～40cm、深さ12～30cmを測る。ＳＤ04溝に切られているが、ＳＢ01と同様にＳＤ04の埋土に掘り込まれた柱穴が識別できなかった可能性もあるので、ＳＤ04との先後完形も同様に不明である。

ＳＢ03（第５図、図版１）　調査区中央部のやや西寄りで検出した。建物の東半部がＳＢ04・05と重複している。梁間２間、桁行３間の建物である。梁間の全長6.2m、桁行の全長4.8mを測る。柱穴は円形で、径23～50cm、深さ 6～36cmを測る。方位はＮ－35°－Ｗにとる。

ＳＢ04（第５図、図版１）　調査区中央部のやや西寄りで検出した。ＳＢ05と重複して検出された

第４図　下月隈天神森遺跡第２次調査遺構配置図



第 5 図　掘立柱建物実測図(1)

梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ05の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－44°－Ｗにとり、ＳＢ05よりやや東にふれる。梁間の全長6.7m、桁行の全長4.7mを測る。柱穴は円形で、径18～42cm、深さ10～44cmを測る。

ＳＢ05（第６図、図版１）　調査区中央部のやや西寄りで検出した。ＳＢ04と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ04の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－53°－Ｗにとり、ＳＢ04よりやや西にふれる。梁間の全長6.4m、桁行の全長3.9mを測る。柱穴は円形で、径22～50cm、深さ 6～40cmを測る。

ＳＢ06（第６図、図版１）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ07・08・09・10と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。他の掘立柱建物の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、それらとの先後関係は不明である。方位はＮ－68°－Ｅにとり、他の掘立柱建物の主軸方位と大きく異なる。梁間の全長7.2m、桁行の全長4.7mを測る。柱穴は円形で、径20～60cm、深さ8～42cmを測る。

ＳＢ07（第６図、図版１）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ08と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ08の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－38°－Ｅにとり、ＳＢ08と主軸の方位を同じくする。梁間の全長6.9m、桁行の全長3.9mを測る。柱穴は円形で、径20～60cm、深さ10～32cmを測る。

ＳＢ08（第６図、図版１）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ07と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ07の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－49°－Ｅにとり、ＳＢ07と主軸の方位を同じくする。梁間の全長6.3m、桁行の全長4.0mを測る。柱穴は円形で、径28～50cm、深さ6～28cmを測る。

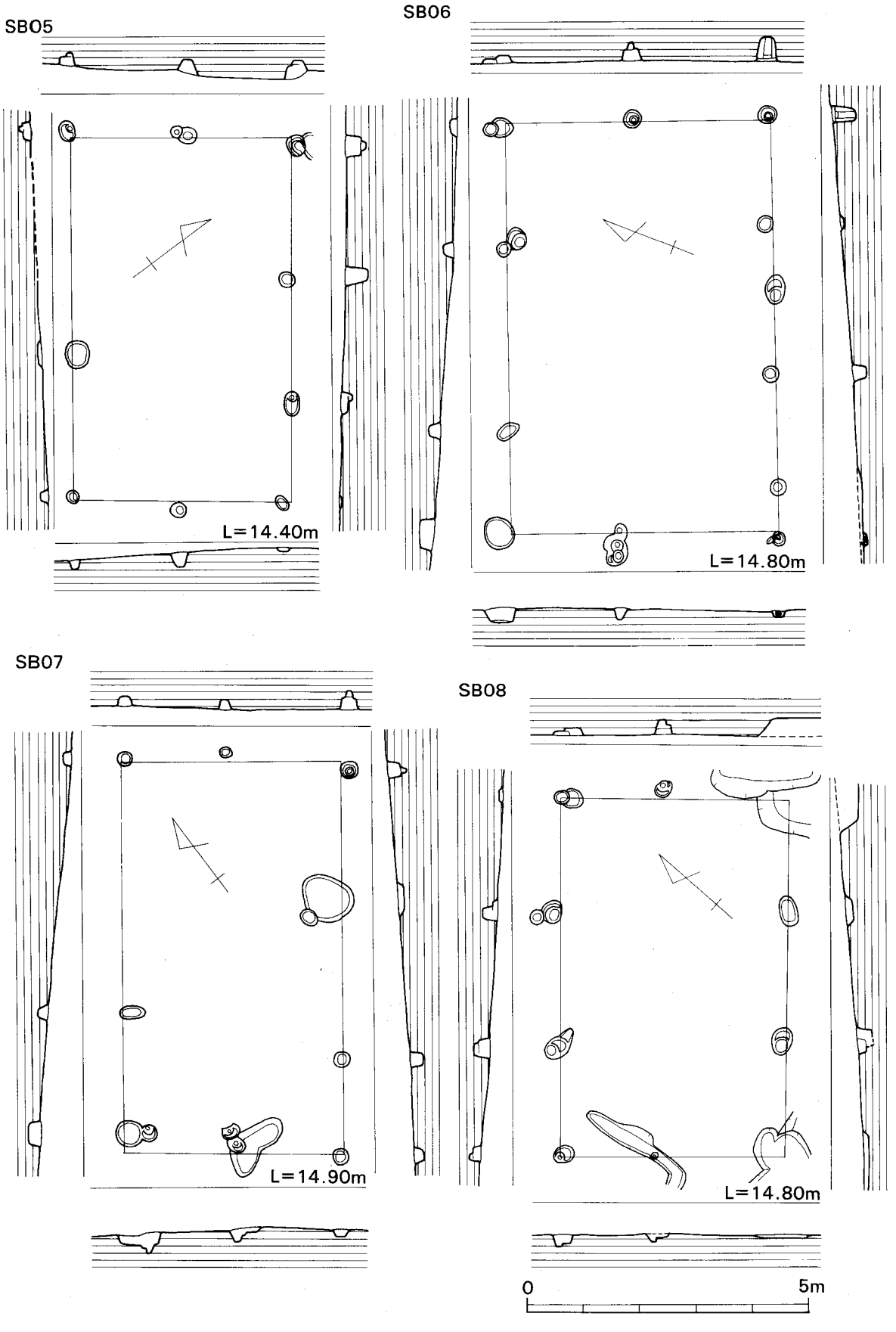
ＳＢ09（第７図、図版１）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ10と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ10の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－46°－Ｗにとり、ＳＢ10の主軸の方位を同じくする。梁間の全長6.7m、桁行の全長4.1mを測る。柱穴は円形で、径18～50cm、深さ8～46cmを測る。

ＳＢ10（第７図、図版１）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ09と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ09の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－44°－Ｗにとり、ＳＢ09と主軸の方位を同じくする。梁間の全長7.0m、桁行の全長4.2mを測る。柱穴は円形で、径30～42cm、深さ12～49cmを測る。

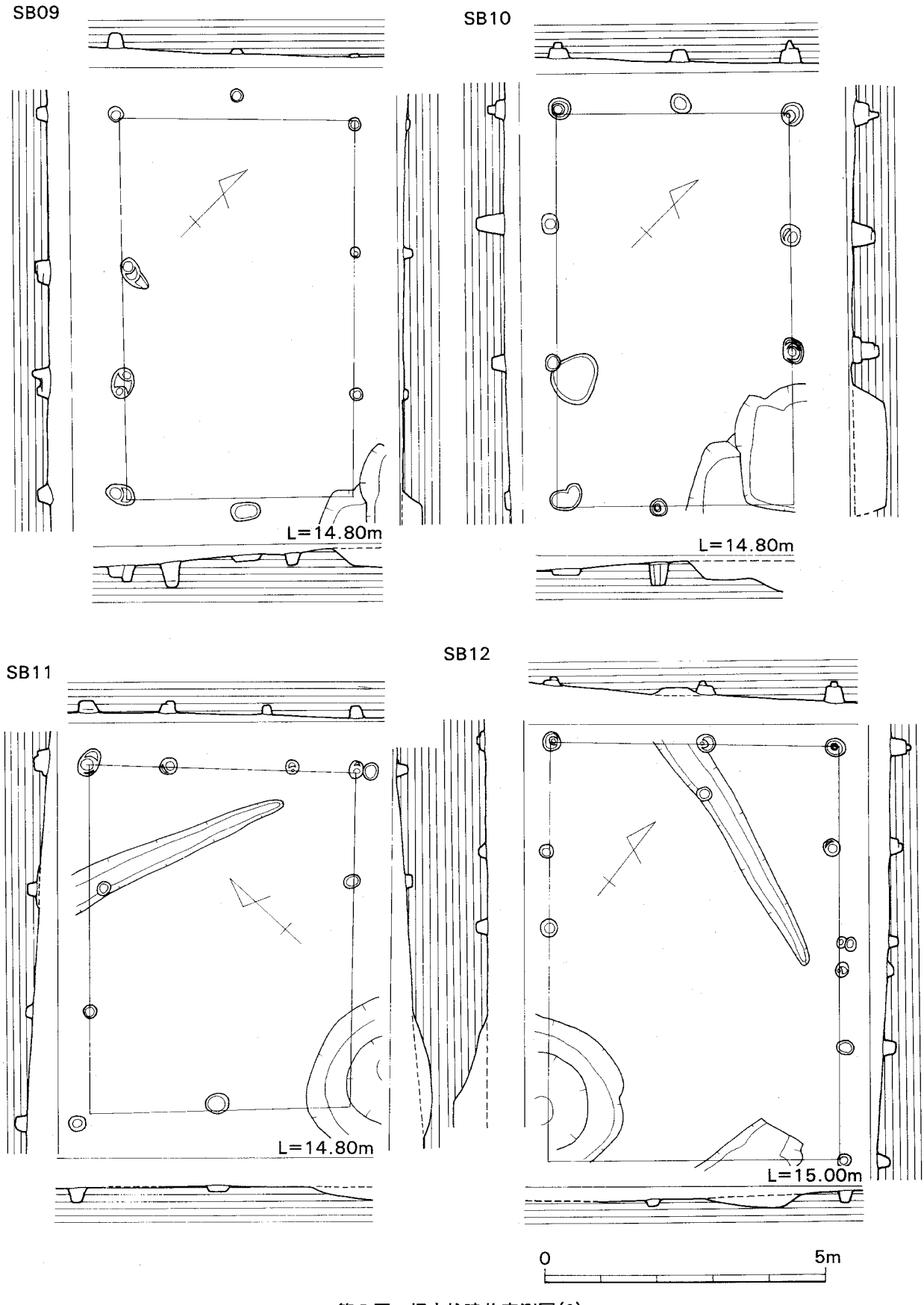
ＳＢ11（第７図、図版１）　調査区中央部のやや南寄りで検出した。ＳＢ12と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ12の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－48°－Ｗにとり、ＳＢ12よりやや西にふれる。梁間の全長6.1m、桁行の全長4.6mを測る。柱穴は円形で、径20～44cm、深さ11～36cmを測る。ＳＫ05土壙と重複しているが、ＳＫ05の埋土に掘り込まれた柱穴は識別できなかった。

ＳＢ12（第７図、図版１）　調査区中央部のやや南寄りで検出した。ＳＢ11と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。ＳＢ11の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はＮ－38°－Ｗにとり、ＳＢ11よりやや東にふれる。梁間の全長7.4m、桁行の全長5.1mを測る。柱穴は円形で、径18～36cm、深さ11～36cmを測る。ＳＢ11と同様ＳＫ05土壙と重複しているが、ＳＫ05の埋土に掘り込まれた柱穴は識別できなかった。

ＳＢ13（第８図、図版３）　調査区の東寄りで検出した。ＳＢ14と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。梁間の全長6.2m、桁行の全長3.2mを測る。柱穴は円形で、径15～42cm、深さ11～46cmを測る。ＳＢ14の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方



第 6 図　掘立柱建物実測図(2)



第 7 図　掘立柱建物実測図(3)

位はN－40°－Wにとり、ＳＢ14と主軸の方位を同じくする。ＳＤ43溝に切られているが、ＳＤ43の埋土に掘り込まれた柱穴が識別できなかった可能性もあるので、ＳＤ43との先後完形は不明である。

ＳＢ14（第８図、図版３）　調査区の東寄りで検出した。ＳＢ13と重複して検出された梁間２間、桁行３間の建物である。梁間の全長5.9m、桁行の全長3.5mを測る。柱穴は円形で、径24～49cm、深さ 9～26cmを測る。ＳＢ13の柱穴と切り合い関係にある柱穴はなく、その先後関係は不明である。方位はN－40°－Wにとり、ＳＢ13の主軸の方位を同じくする。ＳＤ43溝に切られているが、ＳＢ13と同様にＳＤ43の埋土に掘り込まれた柱穴が識別できなかった可能性もあるので、ＳＤ43との先後完形も同様に不明である。

土壙　調査区中央部のやや東寄りで、ＳＤ01溝の西側に集中して検出された。

ＳＫ28（第９図、図版３）　平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長3.5m、幅2.0m、深さは中央部で65cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。ＳＫ29を切る。方位はN－32°－Wにとる。

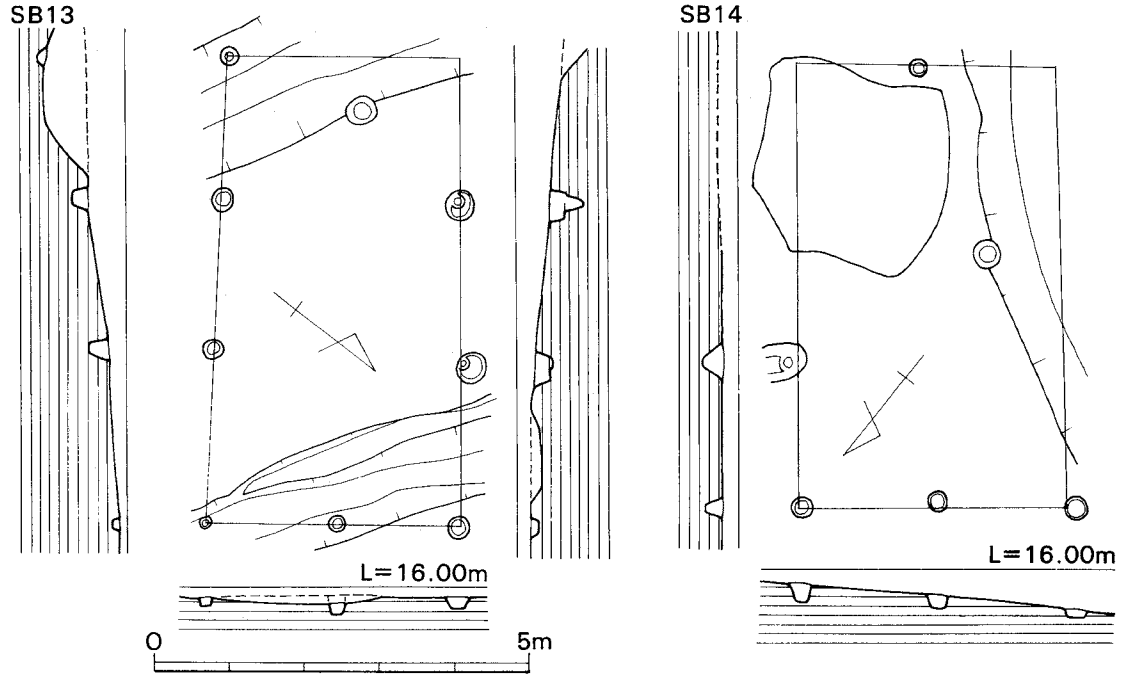
ＳＫ36（第９図、図版３）　平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し、全長3.5m、幅2.5m、深さは中央部で70cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。ＳＫ37に切られる。方位はN－39°－Wにとる。

ＳＫ35（第10図、図版３）　平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長2.0m、幅1.5m、深さは中央部で40cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。ＳＫ37に切られる。方位はN－36°－Wにとる。

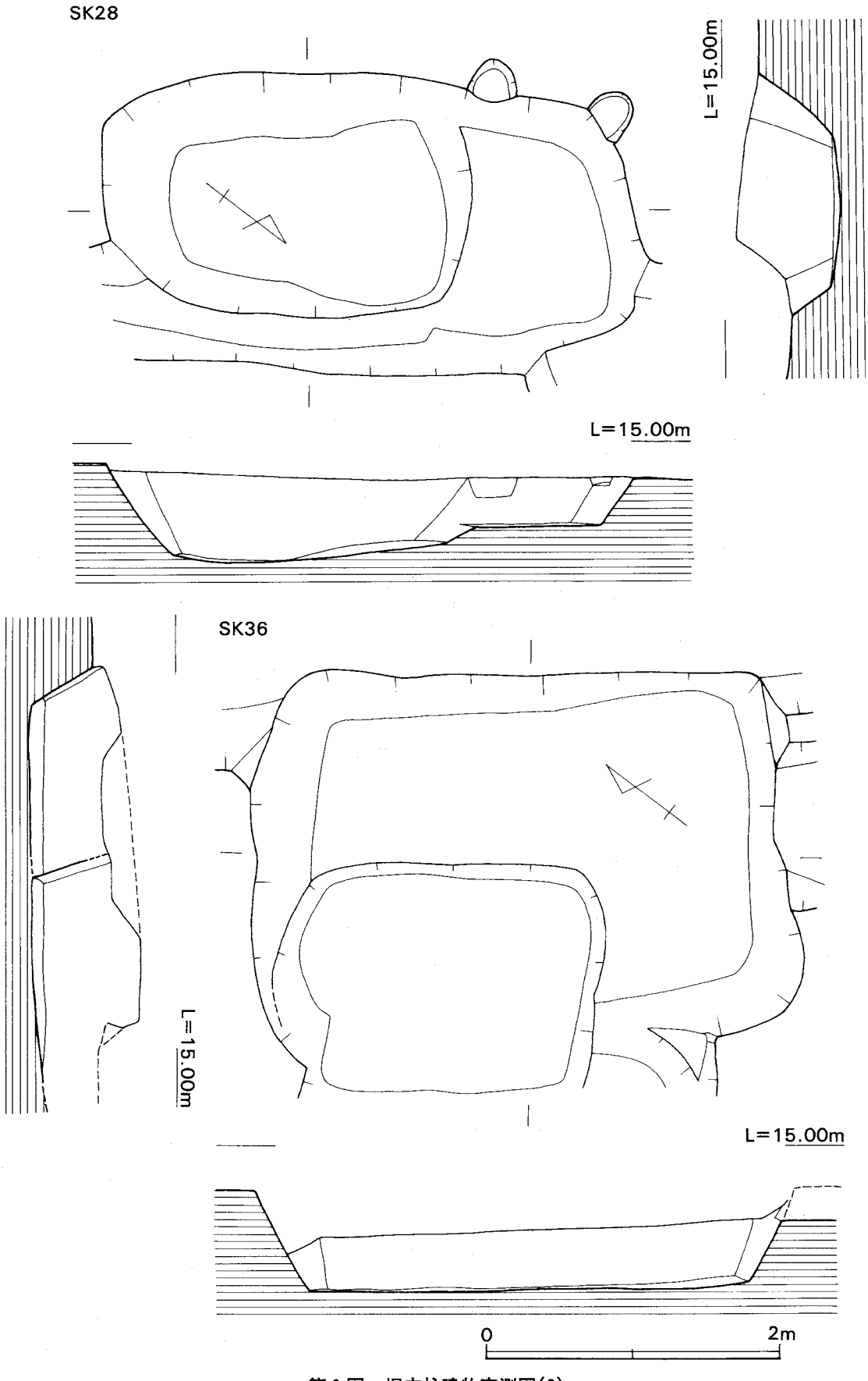
ＳＫ37（第10図、図版３）　平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長2.2m、幅1.7m、深さは中央部で30cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。ＳＫ36を切る。方位はN－35°－Wにとる。

ＳＫ05（第10図、図版３）　調査区中央部のやや南寄りで検出した。平面形は不整円形を呈し、径2.5～2.8m、深さ1.1mを測る。壁が斜めに立ち上がり、断面はすり鉢を呈する。

井戸　ＳＥ25（第11図、図版３）　調査区中央部のやや南東で検出した。平面形は不整円形を呈し、径 2.2～2.9m、深さ2.0mを測る。壁が斜めに立ち上がるが、傾斜は急である。底面より0.5m浮いた状態で出土した。



第８図　掘立柱建物実測図(4)



第 6 図　掘立柱建物実測図(2)

甕棺墓　ＳＸ38（第12図、図版２）　調査区中央部の北端で検出した。上甕、下甕にあたる壷の口縁部を打ち欠き、接口としている。劣化が著しく、復元不能。

土壙墓　ＳＸ34（第12図、図版２）　調査区中央部の北端で検出した。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、全長2.5m、幅1.4m、深さは中央部で35cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。北側が一段高くテラス状に掘られている。墓壙の北側で供献とみられる土師器が出土したが、劣化が著しくその形態は不明である。

2　出土遺物

ＳＤ01出土遺物（第13図、図版４）

青磁　碗（１～３）　１は内面に印花文を押捺している。緑色の釉が、厚く掛けられている。２は片切彫の蓮弁をもち、淡緑色の釉が厚く施釉されている。３は内面に２条単位の凸線、間に花弁文からなる印花文を配する。気泡の多いやや灰色を帯びた緑色の釉が、高台見込部分を除いて厚く掛けられている。

朝鮮王朝青磁　碗（４・５）　内底および畳付に目跡が付着している。灰緑色の釉が内外面にかかる。胎土は灰～淡赤褐色を呈する。

陶器　すり鉢（６）　６本単位の筋目を入れ、赤褐色に焼成された備前焼のすり鉢である。

ＳＤ03出土遺物（第13図、図版４）

青花　皿（７・８）端反りの口縁部片と高台畳付の釉をカキ取った底部片である。内外面ともに染付けされている。

青磁　盤（９・10）　内面に凹線による蓮弁が描かれている。胎土は灰白色を呈し、気泡の多い淡緑色透明の釉が比較的厚めに掛けられている。

ＳＤ04出土遺物（第13図、図版４）

陶器

鉢（11）　口縁部を折り返し、肥厚させている。平坦な口縁端部は内傾し、目跡が残る。緑色の釉が施釉され、釉下には化粧土が掛けられている。胎土は灰色を呈する。

甕（12）　「Ｙ」字状口縁の大型の甕の口縁部片である。胎土には白色砂粒を多量に含み、淡小豆色を呈する。黄褐色の釉が掛けられている。

ＳＤ07出土遺物（第13図、図版５）

石臼（13）　凝灰岩製で、茶臼の受皿部である。

陶器　皿（14）　唐津系陶器の底部片で、内底に胎土目が残る。胎土は赤褐色を呈し、釉は淡緑灰色で貫入が多くみられ、体部外面下半は露胎である。

瓦質土器　すり鉢（15）　体部下半の破片資料で、内面に細かい刷毛目を施した後、６本単位の筋目を入れる。内底部にも、巴状に筋目を入れる。

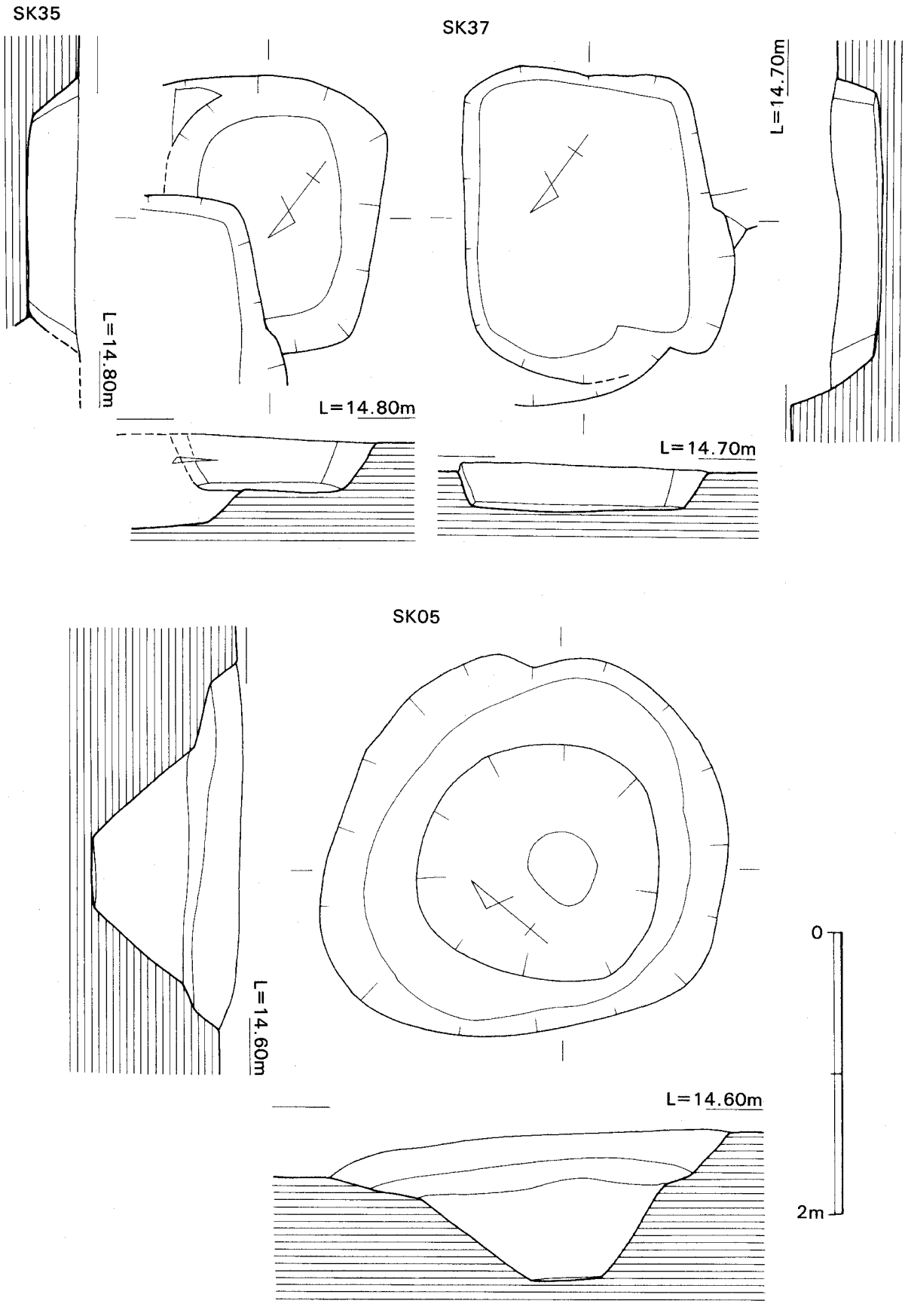
ＳＤ13出土遺物（第13図、図版　５）

白磁　皿（16）　底部の削り出しは浅く、鋭さを欠く。胎土は淡黄白色を呈する。釉は無色透明で、細かい貫入がみられ、遺存する外面は露胎である。

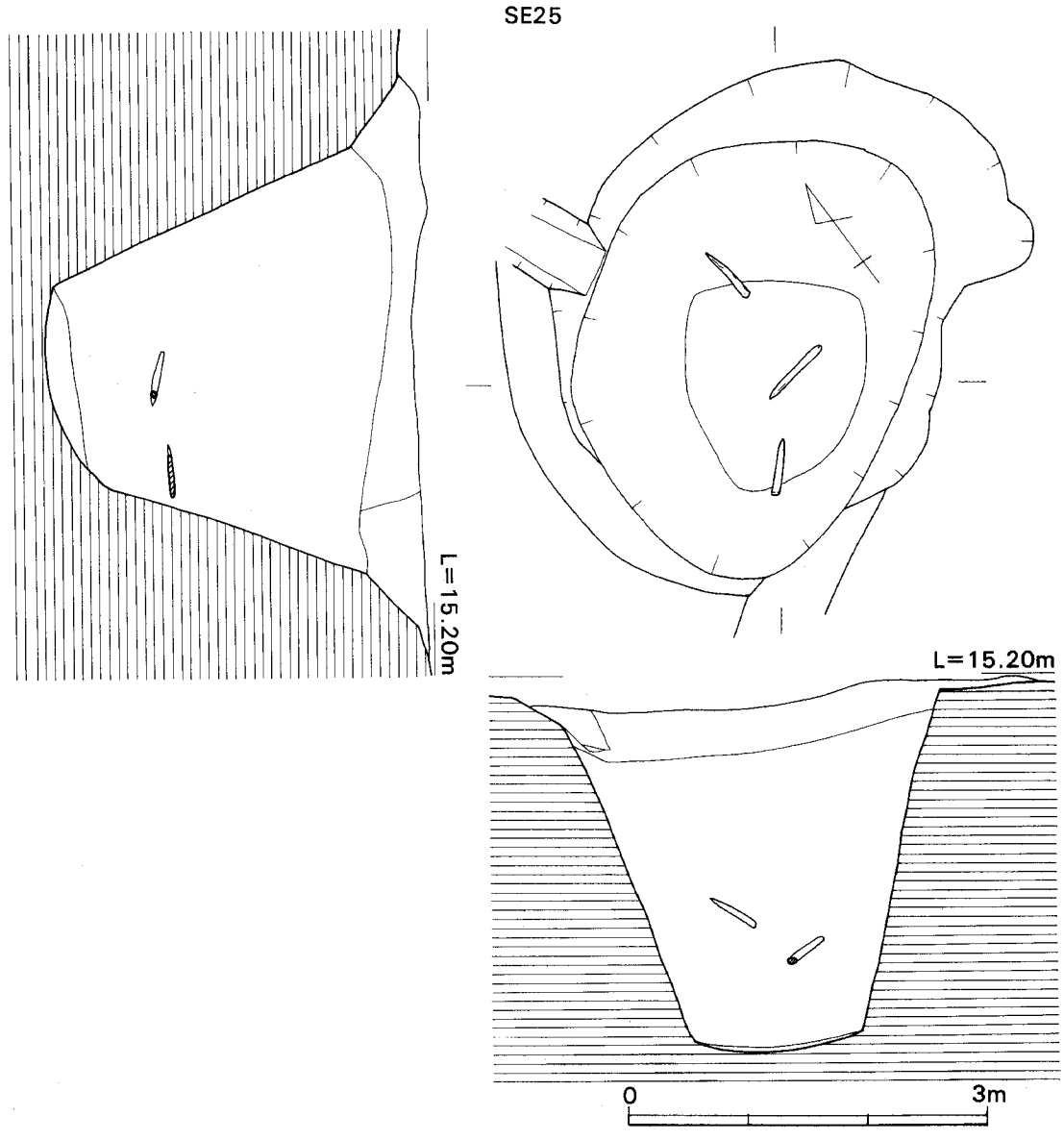
ＳＤ42出土遺物（第13図、図版４・５）

土師器　小皿（17）　底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。底部中央付近に一辺 5mmの隅丸正方形の穿孔がなされる。復元口径 7.6cm、器高 1.2cm、底径 5.2cmを測る。

滑石製石鍋（18・19）　18は片口鉢状を呈し、口縁部から 1.0cm下方に断面台形の鍔をめぐらせ


SK35
SK37
L=14.70m
L=14.80m
L=14.80m
L=14.70m
SK05
L=14.60m
L=14.60m
0
2m

第10図　土壙実測図(2)



第11図　土壙実測図(3)

る。19は内湾する体部をもち、口縁部から 1.8cm下方に断面台形の鍔をめぐらせる。

ＳＤ45出土遺物（第13図、図版　4・5）

土師器　小皿（20）　底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。口径 7.8 cm、器高 1.3cm、底径 5.4cmを測る。

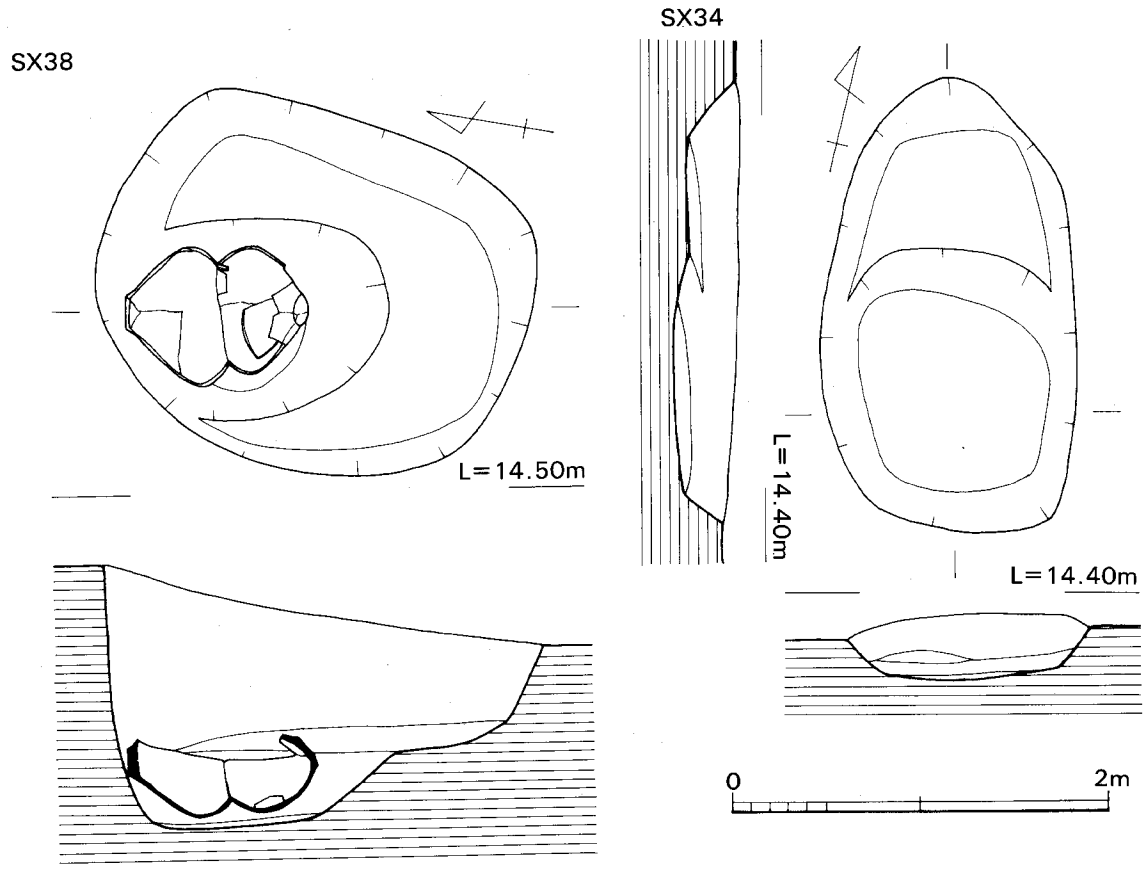
土錘（21）　全長 6.4cm、径 3.0cmを測る管状のものである。

ＳＥ25出土遺物（第13図、図版５）

土師器　小皿（22）　底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。口径 8.2 cm、器高 1.8cm、底径 5.4cmを測る。

白磁　皿（23）　不透明な淡灰白色の釉が、高台畳付を除いて施釉されている。高台内側は斜めに削りだされ、高台内見込みの中心には突起が残る。内面に印花文が押捺されているが、不透明な釉のために不明瞭である。胎土は灰白色を呈する。いわゆる「枢府磁」である。

青磁　碗（24・25）　淡緑色の釉が掛けられ、胎土は灰白色を呈する。24は内底および高台見込み



第12図　甕棺墓・土壙墓実測図

の釉を輪状にカキ取る。25は高台見込み部分が露胎である。

ＳＫ29出土遺物（第13図、図版５）

白磁　皿（26）　体部中位で屈曲し、口縁部はさらに外反する。灰白色透明の釉が掛けられ、内底見込みの釉を輪状にカキ取り、体部外面下半は露胎である。

Pit147出土遺物（第13図、図版５）

土師器　小皿（27）　底部は糸切離しにより、体部は横ナデ、内底部はナデ、外底部には板状圧痕がみられる。口径 8.5cm、器高 1.5cm、底径 5.8cmを測る。

Pit148出土遺物（第13図、図版５）

土師器　杯（28）　底部は糸切離しにより、体部外面から内底部まで横ナデされる。口径12.0cm、器高 2.5cm、底径 7.5cmを測る。

Pit15 出土遺物（第14図、図版６）

土師器　杯（29～31）　底部は平たくヘラ切り、大きく開く体部は横ナデ、内底はナデ。

ＳＫ05出土遺物（第14図、図版６）

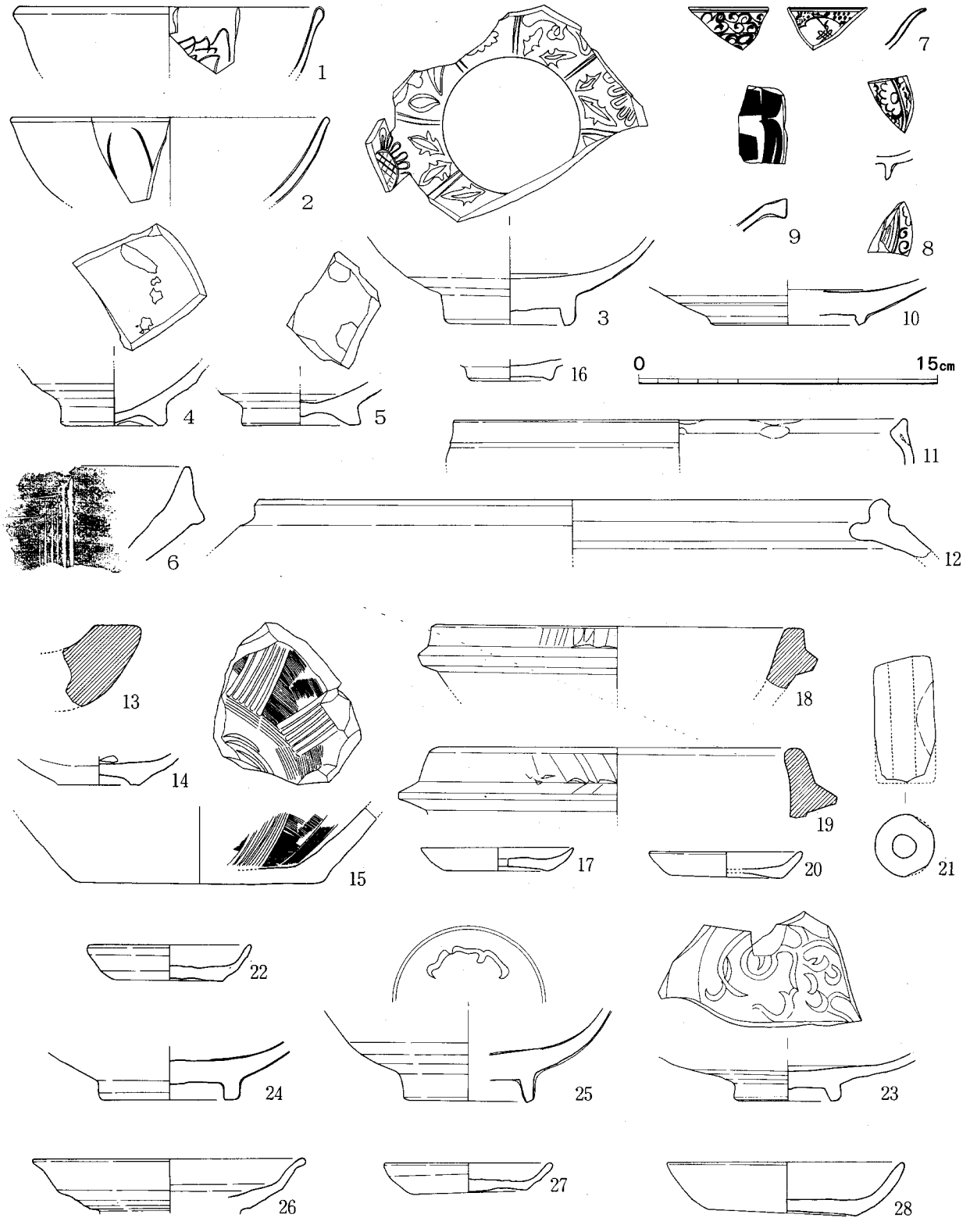
須恵器　杯蓋（32）　天井部は水平で、外面は回転ヘラ削りされる。つまみは欠失。口縁部は断面三角形で外反し、内面の体部との境は明瞭である。

ＳＤ41出土遺物（第14図、図版６）

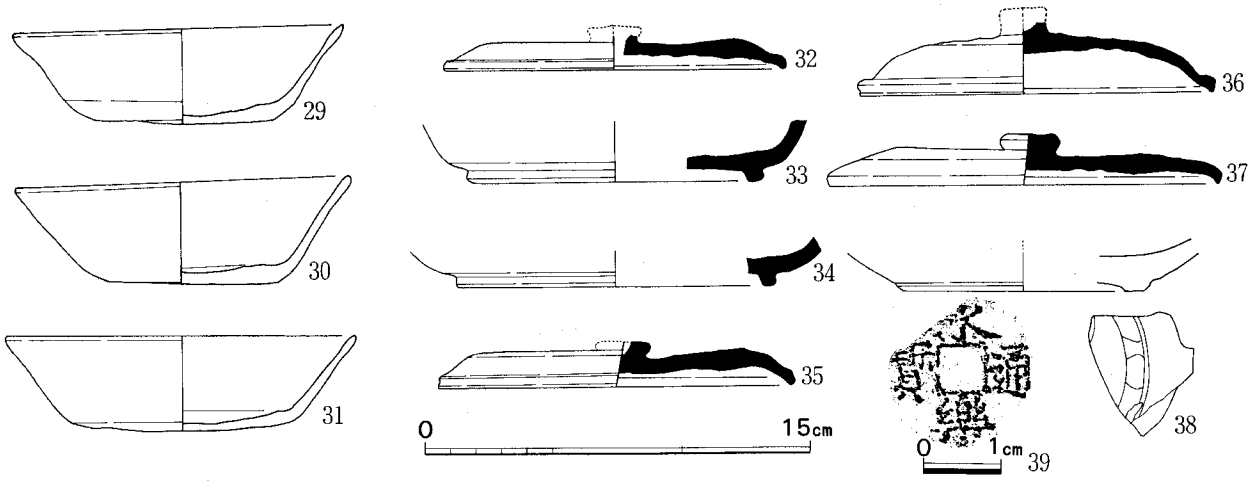
須恵器　杯（33～34）　底部と体部の境に稜がつき、断面四角形の高台は底端部よりやや内側につく。

ＳＤ42出土遺物（第14図、図版６）

須恵器　杯蓋（35）　天井部は水平で、外面は回転ヘラ削りされる。偏平なボタン状のつまみがつ



第13図　出土遺物実測図(1)



第14図　出土遺物実測図(2)

く。口縁部は断面三角形で外反し、内面の体部との境はやや不明瞭である。

ＳＤ43出土遺物（第14図、図版６）

須恵器　杯蓋（36）　天井部は丸くつくられており、外面は未調整である。口縁部は退化しており、内面の体部との境は不明瞭である。

ＳＤ45出土遺物（第14図、図版６）

須恵器　杯蓋（37）　天井部は水平で、外面は回転ヘラ削りされる。頂部がわずかに尖った偏平なボタン状のつまみがつく。口縁部が断面三角形で内傾し、内面の体部との境は不明瞭である。

ＳＤ04出土遺物（第14図、図版６）

越州窯系青磁　碗（38）輪状高台の底部片である。内面の釉は剥離している。畳付に目跡がつく。

銅銭（第14図、図版４）　初鋳年1408年の永楽通寶で、Pit51からの出土である。

Ⅴ　小　　結

今回の調査地は谷間の西面する緩斜面であったが、後世の段状の造成に加え、家屋解体の際の10カ所におよぶ廃棄物処理坑、排水溝等によって特に調査区の東側と南西側は大きく損壊を受けていた。検出された遺構は削平を免れた部分に限られ、遺跡の全貌を窺うのは非常に困難である。検出された遺構は柱穴、溝、土壙で、柱穴の内14棟分を建物としてまとめることができた。遺構の時期は一部を除いて14世後半から15世紀前半までの短い期間におさまるようである。Ｌ字状、コ字状に建物群を廻っていた溝は、区画のためにめぐらされたと同時に、谷間の湧水を流す目的で開鑿されたのであろう。建物群の構成は重複関係から最低４期に区分することができる。東西棟のＳＢ07・08、南北棟のＳＢ09・10はほぼ方向を同じくしているが、重複した形で検出された。ＳＢ08はＳＢ07、ＳＢ10はＳＢ09より半間分ずれた位置にあり、ＳＢ01・02も同様な関係にあり、それぞれほぼ同じ位置で建物の老朽化に伴う立て替えによるものであろう。

８～９世紀の遺構はＳＫ05土壙、Pit15ピット状遺構に、限られるが、ＳＤ41・43等の中世の溝から須恵器片が出土しており、14世紀後半から15世紀にかけての造成で少なくない数の当該期の遺構が破壊されたとみられる。

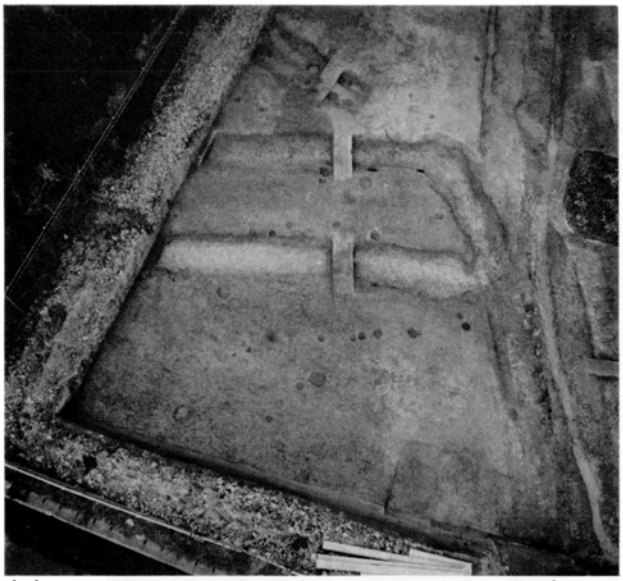
小丘陵よりの調査区中央北端部では弥生時代前期後半の甕棺墓１基が検出された。今回の調査対象地のほとんどは谷間に位置しており、８～９世紀より以前には開発はおよんでいない。

図　　版

(1) 下月隈天神森遺跡第 2 次調査全景（上空から）

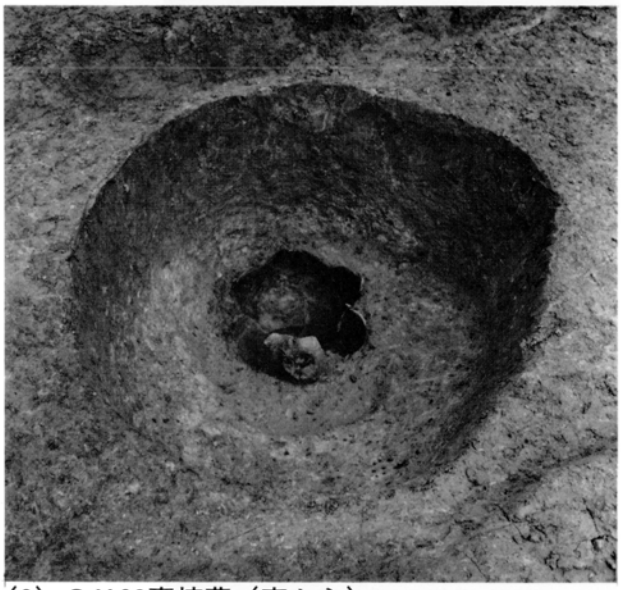
(2) 下月隈天神森遺跡第 2 次調査全景（南から）

図版 2

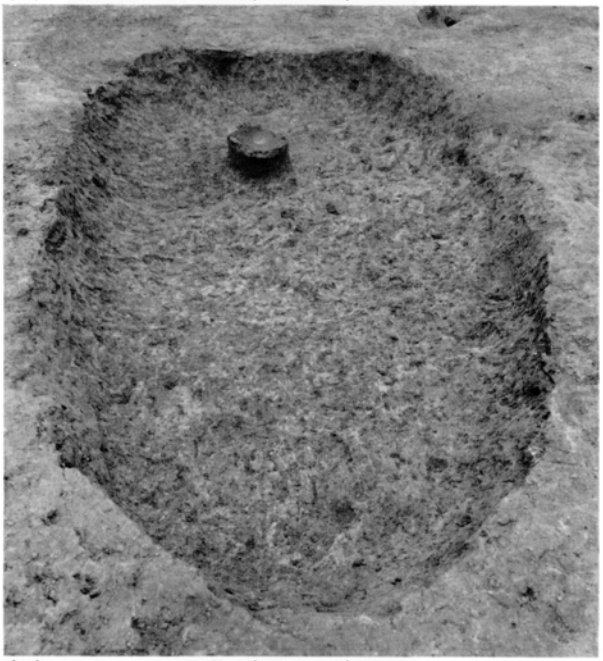


(1) ＳＢ01・02掘立柱建物、ＳＤ03・04溝（西から）

(2) ＳＤ10・11溝（南から）



(3) ＳＸ38甕棺墓（南から）

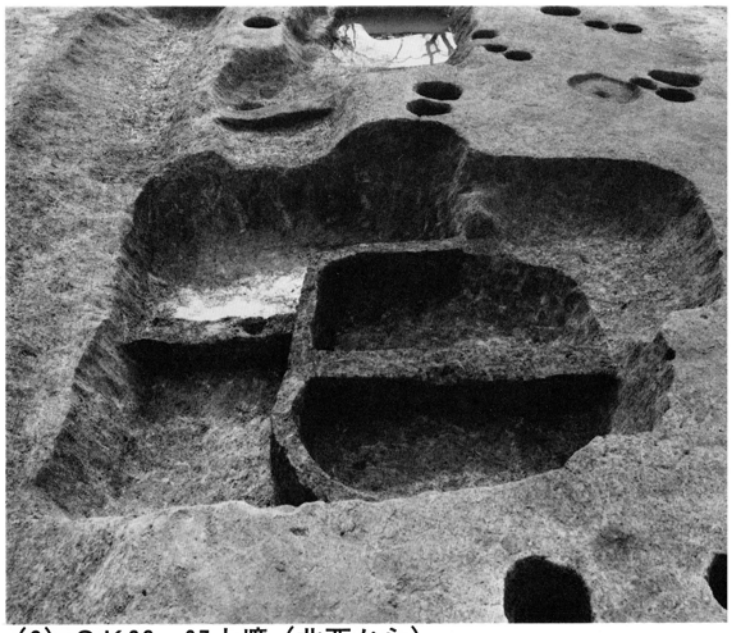


(4) ＳＸ34土壙墓（南から）

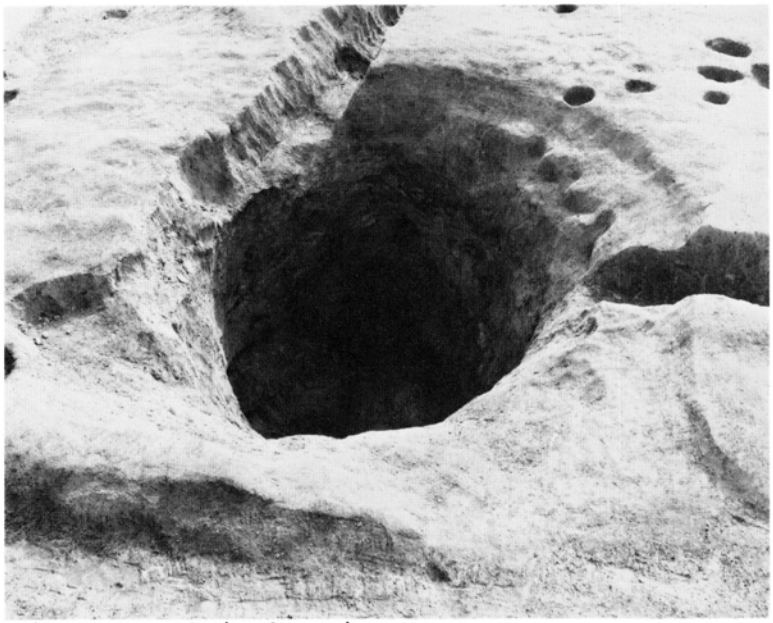
(5) ＳＫ28土壙（南東から）

(6) Pit15土壙（　から）

(1) ＳＫ28土壙（南西から）



(2) ＳＫ36・37土壙（北西から）

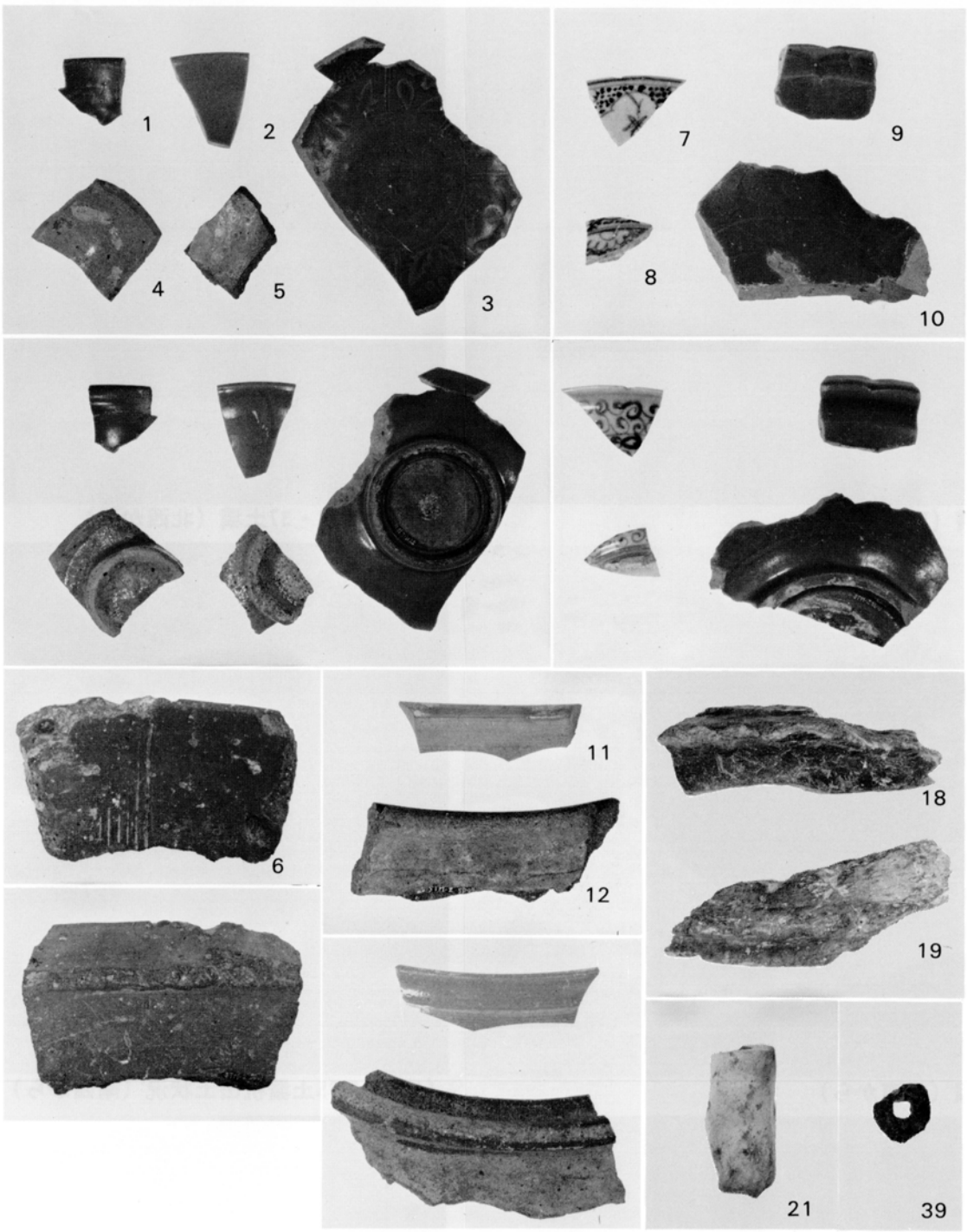


(3) ＳＥ25土壙（北東から）

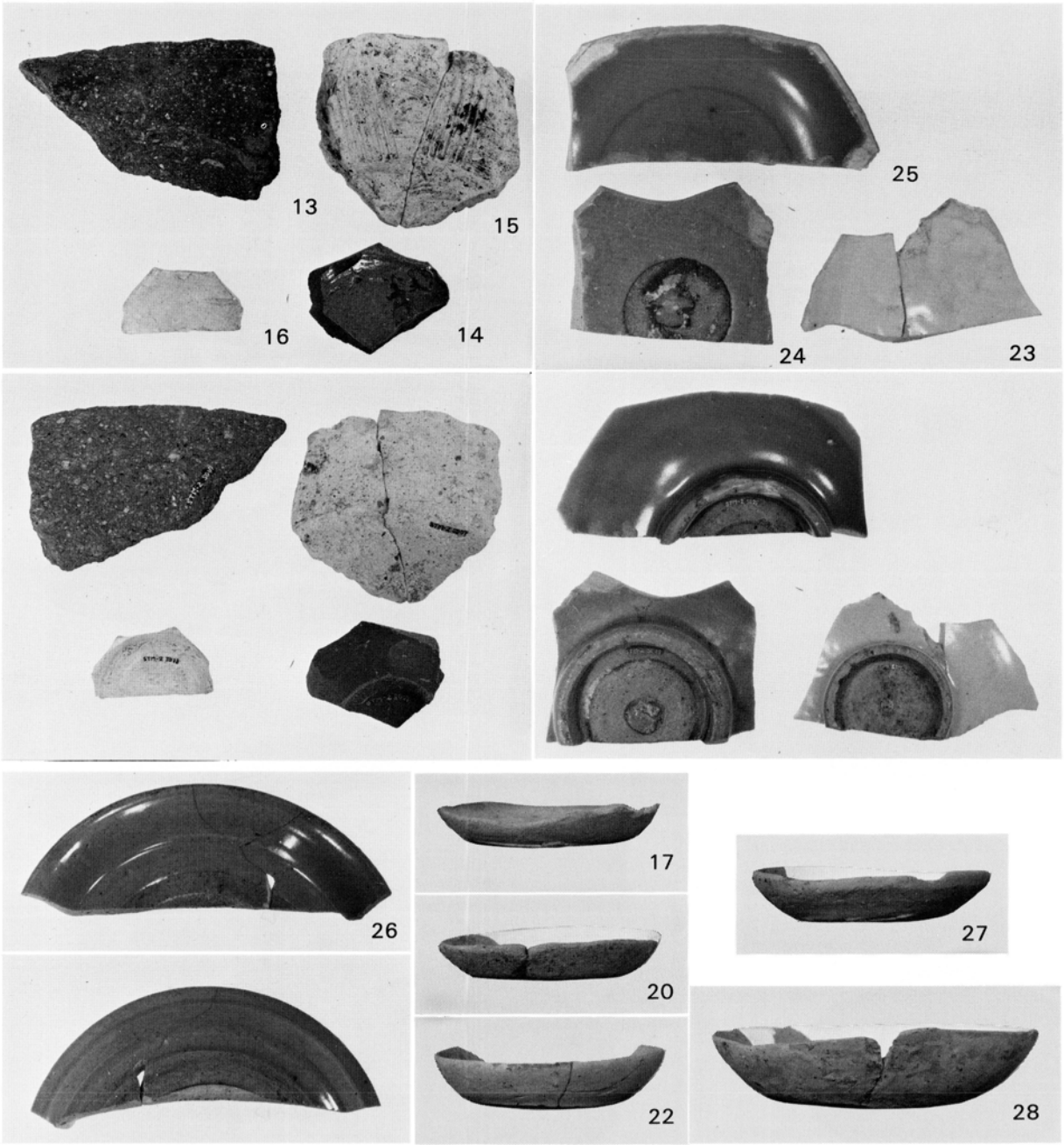
(4) ＳＥ25土壙杭出土状況（南西から）

(5) ＳＫ05土壙（北から）

(6) 調査区東側（北から）

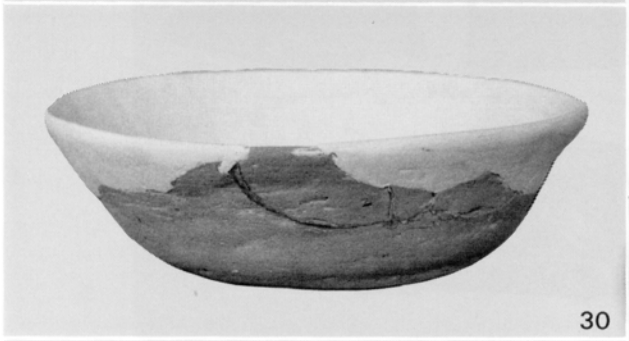


SD01（1～6） SD03（7～10） SD04（11・12）
SD42（18・19） SD45（21） 出土陶磁器・土製品、銅銭（39）



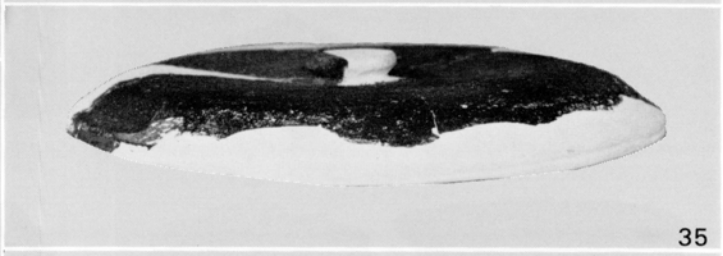
ＳＤ07（13～15） ＳＤ13（16） ＳＤ42（17） ＳＤ45（20）
ＳＥ25（22～25） ＳＫ29（26） Pit147（27） Pit148（28）
出土土師器・陶磁器

29

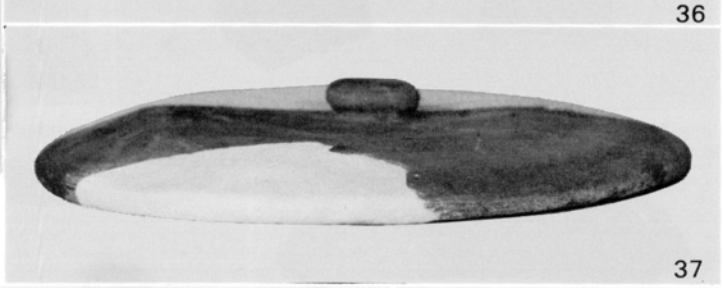

30

31

32

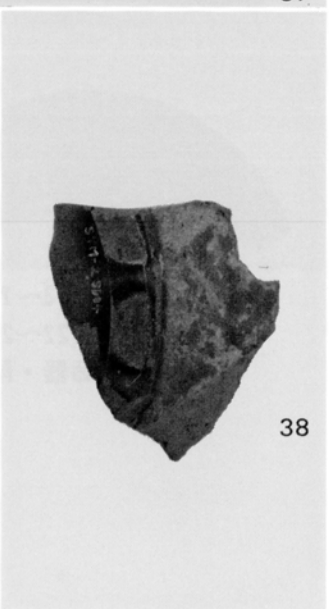

35

36


37

33

34


38

Pit15 (29～31) SK05 (32) SD41 (33・34) SD42 (35)
SD43 (36) SD45 (37) SD04 (38) 出土土器・陶磁器

下月隈天神森遺跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第456集

1996年（平成８年） ３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
(092) 711－4667

印　刷　金丸印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭６－46－１
(092) 621－4257